ち、革命以前の人物は４名、近・現代の人物が圧倒的多数。哲学者３名、文学者２名であって、政治家が断然多い。右翼（保守）に位置づけられる人物と並んで、左翼に属する人物も７名。レジスタンス運動に関わった人物は10名近く。ただし先に触れたように、その敵であったヴィシー政府関係者、対独協力者に関わる「暗黒」史の断罪には消極的である。

＊＊＊＊

日本の政治家の演説、例えば所信表明演説には格調と説得力が備わっているであろうか。日本の政治家にとって誰が偉人なのであろうか。小泉元首相については長岡藩士小林虎三郎、安倍元首相については吉田松陰の名を挙げうる。福田前首相にとっては、また麻生首相にとっては誰が？さらに、私を含め、日本人にとって「偉人」として誰の名を挙げうるのであろうか。ここには、日本人が辿ってきた歴史そのもの、歴史叙述のあり方、さらには歴史教育が大きな問題を抱えていることが垣間見られるように思えてならない。

＊＊＊＊＊

就任後１年半近く。サルコジ人気には翳りがみられるものの、過去20数年間の政治を旧套墨守とし、それとの断絶を前面に押し出すスタイルには、ブッシュ（イラク侵攻を「十字軍」に譬え）や小泉（郵政改革、刺客）やフランス極右「国民戦線」の党首ルペン（すべての悪の根源は移民にある、とするディスクール）には及ばないが、扇情的大衆動員、大衆迎合主義とでも訳すべきポピュリズム populisme の側面がある。また、半大統領制（あるいは二元的議院内閣制）という枠組みをもつフランスにおいて、大統領権限の拡大や自律化を志向し、憲法改正を成し遂げた。ここには、「大統領化 présidentialisation」と呼びうる現象が存在する。以上２点については、今後、機会を改めて論じてみたい。(2008年11月２日脱稿)

ミュージカルへのお誘い
―『オペラ座の怪人』編―

経営学部
太田　幸治

今回もミュージカルへの誘い

筆者が書いた前回の『語研ニュース』の記事への反響が少なからずあった。反響の中に、「太田がミュージカルが好きだというのが意外だった」というものが複数あった。筆者がミュージカル好きなことは、そんなに意外なことなのか。筆者は常日頃、優雅に立ち振る舞っていると思っていたのだが。と、カミさんに家で話をしたところ、「いつも汚い服装に、リュックサックを背負って猫背で歩いているお前さんを見て、ミュージカルの優雅さを連想する人はいない。」と言われ、「ほぉ、そういうものなのか。」と複雑な感想を持ったものである。

今回は私が書く話としては、意外性のない話にしてみたいと思う。

今回のテーマは、ラブ・ストーリー。

といっても、今回もまたミュージカルの話。

ロンドンの『オペラ座の怪人（The Phantom of the Opera)』について書く。

『オペラ座の怪人』は、もともとは、フランスの作家、ガストン・ルルーが書いたホラー小説である。しかし、ミュージカル版の『オペラ座の怪人』は、ホラーではなく、甘くそして切ないラブ・ストーリーに仕上がっている。

今回とりあげるミュージカル版『オペラ座の怪人』は、1986年にロンドンで生まれたミュージカル。1986年にロンドンの Her Majesty's Theatre で開幕して以来、同じ劇場で2008年の今日まで約22年もの間上演され続けている。また日本では1988年から劇団四季が翻訳版を上演している。

筆者にとって、この作品の魅力は３つ。まず、巨大なシャンデリアをはじめとする当時のオペラ

座と、オペラ座の怪人が住む世界を再現した豪華なセット。次に、怪人の歌姫クリスティーヌへの片想いを描いた物語。そして最後に『CATS』の作曲家のアンドリュー・ロイド・ウェバーが当時の妻であったサラ・ブライトマン（初演で彼女はクリスティーヌを演じた）のために書いた甘く切なく耳に残る名曲の数々。

写真１：ロンドンの『オペラ座の怪人』が上演されているHer Majesty's Theatre。このクラシカルな雰囲気が、作品の世界観をいっそう引き立てる。

写真２：Her Majesty's Theatreの入り口。筆者はこの入り口に立つだけで、心が高揚する。

ミュージカル版『オペラ座の怪人』のストーリー

ミュージカル版『オペラ座の怪人』のストーリーについて簡単に解説しておこう。

舞台は19世紀終わりのパリ・オペラ座。このオペラ座は、客席上に巨大なシャンデリアがある豪華絢爛な劇場という設定である（パリのオペラ座・ガルニエがモデルであろう）。このオペラ座には、奇怪な噂があった。それは、このオペラ座の地下室には、怪人が住んでいて、その怪人は、残忍な事件を起こし続けていると。

新公演『ハンニバル』の舞台稽古中、突如、主演女優が降板してしまう。代役はいないのかと右往左往する劇場経営者たちに、オペラ団のバレエ教師はただのコーラス・ガール（その他大勢の役を演じている）のクリスティーヌ・ダーエという少女を推薦する。バレエ教師の話によれば、彼女は、偉い歌の先生に習っているという。経営者たちは、クリスティーヌに「誰に習っているのか？」尋ねる。すると彼女は「それがいえないんです…。」と答える。不安になる経営者たち。しかし、クリスティーヌは、主演女優の代役を見事な歌唱力で歌いきり、大喝采を浴びたのである。

その夜、クリスティーヌがオペラ座の楽屋に戻ると、幼馴染のラウル・シャニュイ子爵がやってくる。約10年ぶりに再会した２人は再会を喜びあう。食事に行こうとクリスティーヌを誘うラウル。ラウルが帽子を取りに言ってくると楽屋を出た後、クリスティーヌはこうつぶやくのであった。

「昔のままの私たちじゃないのよ。ラウル…。」

すると、楽屋の鏡の奥から恐ろしく、かつ、セクシーな歌声がクリスティーヌの耳に聞こえてくる。

「私の宝物に手を出す奴。無礼な若造め。愚か者め。…鏡に向かって瞳こらせば、私がいるのだ。その中に。…おいで、エンジェル・オブ・ミュージック、ここだ、エンジェル・オブ・ミュージック…」（日本版の訳詞（浅利慶太）より。）

声に惹かれるまま鏡の中に吸い込まれていくクリスティーヌ。鏡の中には、黒のコートに身をまとい、顔の半分に仮面をつけた男が彼女を待ち構えていた。

その男こそ、オペラ座の怪人である。怪人は、彼女をオペラ座の地下室にある自分の隠れ家へ連れて行く。その途中、オペラ座の地下にある湖をボートで渡っていく。その湖には、何百本ものキャンドルが立ててあり、キャンドルの炎が湖を照らし、地下という不気味な場所でありつつも幻想的な空間となっている。

怪人は、彼女を自分の隠れ家に連れて行った後、彼女に歌を捧げるのであった。その歌と歌声に取り憑かれるクリスティーヌ。怪人の歌声を聞いている間、彼女は夢を見ているような気分になるのであった。その夢は、危険な男に惹かれる夢。

その数日後から、オペラ座では次々と事件が起こる。主演女優の声が出なくなり、その直後、大道具の主任が舞台上で首を吊られて殺されるのである。

「きっと彼の仕業だわ。」

恐怖におののくクリスティーヌを一生守ることを誓うラウル。そしてラウルとクリスティーヌは、お互いが「君がすべて」であることを確認しあうのだった。

それを物陰から聞いていた怪人は悲しみと怒りを爆発させ、オペラ座の客席上にある巨大なシャンデリアに手をかけるのであった…。

歌詞と曲が涙を誘う

私は、この作品が大好きである。日本では50回くらい観ているし、ロンドンでも４回観ている。理由は、怪人の切ない実らぬ愛を描いているからである。怪人は、音楽家にして建築家、そして哲学者でもあるという類まれなる才能を持ちながらも、顔の半分が爛(ただ)れ、歪んでいるという理由で見世物小屋に入れられ迫害された経験を持つ。その経験から、性格は歪み、殺人を繰り返す。そんな怪人は、自分の愛する女性を自分のものにするためにまた殺人を繰り返す。

これだけ聞くとただの殺人鬼の話になるのだが、この作品はミュージカル。怪人の彼女への想いが甘い音楽に乗って綴られていく。しかも、何度も何度も同じ音楽・フレーズが繰り返される。

例えば、ラウルとクリスティーヌがお互いの愛を確認しあうときに歌う All I ask of you。そのなかに、次のような歌詞がある。

Say you'll share with me one love, one lifetime ...
Let me lead you from your solitude ...
Say you need me with you, here beside you ...
anywhere you go, let me go too
Christine,
That's all I ask of you
(オリジナルの歌詞 (チャールズ・ハート他) より。)

この歌詞をラブラブなカップルが歌うと、甘いラブソングになるのだが（先日、ミュージカル好きのカップルの結婚式で、新郎が新婦にこの曲を弾き語りした。あまりのバカップルぶりに、筆者は新郎新婦を殺してやろうかと思った。)、この歌詞を同じ旋律で、怪人が歌うとまた違ったものになる。怪人が追い詰められて、クリスティーヌに愛を告白するときに歌う歌詞が以下の通り。

Say you'll share with me one love, one lifetime ...
Lead me save me from my solitude ...
Say you want me with you, here beside you ...
Anywhere you go, let me go too
Christine,
That's all I ask of …
(オリジナルの歌詞 (チャールズ・ハート他) より。)

同じ旋律、ほぼ同じ歌詞でも先のラウルのシーンとは違い、そこに恋愛の甘さはなく、切なさだけが漂うシーンである。怪人のどうにもならない感情が、甘い旋律の中でより切なさを引き立たせる。

またオペラ座の地下室で、怪人がクリスティーヌを口説くために歌う The music of the night。この曲は、怪人がクリスティーヌを歌声で惹きつけ、怪人の虜にしてしまう曲である。この曲の最後で怪人はクリスティーヌに、こう歌う。

You alone can make my song take flight ...
<u>Help me</u> make the music of the night
(オリジナルの歌詞 (チャールズ・ハート他) より。)

しかしこの作品の最後では、怪人はこう歌うのである。

You alone can make my song take flight ...
<u>It's over now</u>, the music of the night
(オリジナルの歌詞 (チャールズ・ハート他) より。)

筆者がはじめてオペラ座の怪人を見たとき、物語の最後で号泣した。この切ない話。屈折した怪人の愛に共感したからなのか。終演後、涙が止まらなかった。

『オペラ座の怪人』は、ただいま、日本では大阪で劇団四季が上演中。劇団四季できちんと予習をしてから、ロンドンのピカデリー・サーカスのそばにある Her Majesty's Theatre へ向かうことをお薦めする。この劇場へ行けば、日本の劇場では味わえない、作品にマッチした劇場の雰囲気を含めて、オペラ座の怪人の世界にどっぷりと浸かれ、甘く切ない涙を流せるはずだから。